

## 河本家に伝存する近世実録と読本

島根大学法文学部教授 田 中 則 雄

### 一 はじめに—河本家に伝存する古典籍、本稿の課題—

鳥取県琴浦町赤碕の河本家・稽古有文館には膨大な古典籍群が伝存する。その書目の具体的内容は、原豊二・山藤良治「稽古有文館（河本家）蔵古典籍目録」<sup>①</sup>によって知ることができる。また原豊二「稽古有文館（河本家）蔵古典籍解題」<sup>②</sup>には、この蔵書の特徴について考察がなされている。同論文、また小谷恵造河本家保存会会長の御教示によれば、蔵書の収集は近世中後期頃から始まり、幕末から明治にかけて、十二代通繕、十三代芳蔵の努力によって充実を見たものとされる<sup>③</sup>。いま近世小説書目のうち稿者が考察し得た範囲のみにおいても、稀少あるいは研究上有用な資料を認める。井原西鶴作『日

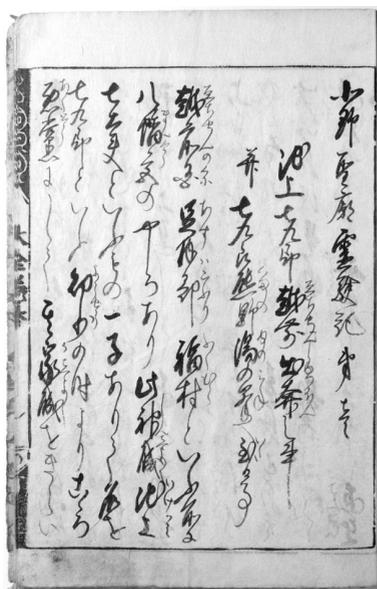
本永代蔵』（貞享五年（一六八八）刊）は、元来六卷六冊。河本本は最終冊を欠くため奥付がどうであったかを知り得ないが、柱刻に「大福新長者教」とあることなど幾つかの点から見て、最も原初に位置づけられる森田庄太郎版の一群と推定される。

本稿では特に実録（実録体小説）と読本に関して取り上げたい。河本家に伝存する書に依拠することによって、実録・読本それぞれの文学としての特色、また実録の読本への影響といった問題について考察することが可能となる。

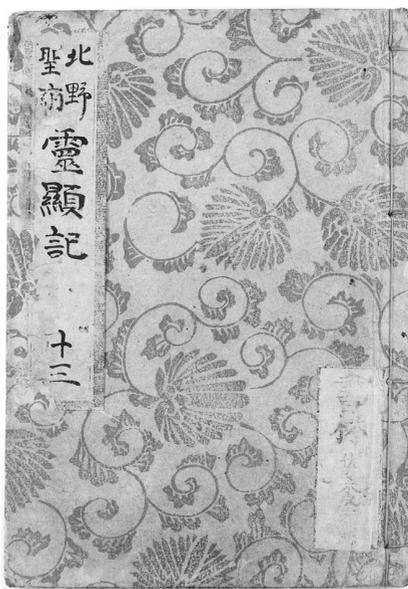
実録『北野聖廟靈驗記』（写本）は伝本が極めて少なく、後述するように読本、歌舞伎にも影響を与えたという点で重要な資料である。また読本『絵本忠臣蔵』（版本）は前編後編全二〇冊が揃っており、初印に近い本であると認める。この二点の資料に関連して考察した所を、以下順に掲げる。

### 二 実録『北野聖廟靈驗記』について

外題は「北野聖廟靈驗記」、内題は「北野聖廟靈驗記」、いま内題による。写本二〇卷二〇冊。この実録の伝本は極め



『北野聖廟靈驗記』卷一冒頭(河本家蔵)



『北野聖廟靈驗記』前表紙(河本家蔵)

て稀である<sup>(4)</sup>。成立年時は確定できないが、河本本は近世後期の筆写と見られる。匡郭の刷られた用箋に大振りな文字で記されており、貸本屋が人を雇って書写させた「仕入本」である<sup>(5)</sup>。石見三郎左衛門が、お菊の父母を殺害し、更に上田慶次郎の父をも殺害したため、お菊と慶次郎は同一の敵を狙うことになって拮抗するが、媒あつて夫婦となり共に石見を討ち取るという話である。

この実録は以下述べていくように、歌舞伎『けいせいゆきみるやま会稽山』、及び読本『北野二葉の梅』の典拠となった。以下読本『北野二葉の梅』と対比し考察した結果を中心に述べる。

二・一 実録『北野聖廟靈驗記』と読本『北野二葉の梅』

栗杖亭鬼卯の読本『北野二葉の梅』は六卷六冊、文化一〇年(一八一三)刊<sup>(6)</sup>。その筋や人物の多くは実録『北野聖廟靈驗記』と合致し、これを典拠としたと認める。

以下『北野聖廟靈驗記』がどのように『二葉の梅』に取り入れられたかを検討するため、まず順に梗概を掲げる。同じ番号の話は相互に対応する。『北野聖廟靈驗記』



『北野靈談 二葉の梅』口絵（慶次郎とお菊）（島根大学附属図書館堀文庫蔵）



『北野靈談 二葉の梅』卷一冒頭（島根大学附属図書館堀文庫蔵）

にあった話を『二葉の梅』で改変している場合は、『二葉の梅』のその番号に「改」と記した。元々『北野聖廟靈驗記』には該当の話がなく、『二葉の梅』で新たに設けられた場合は、『北野聖廟靈驗記』に「ナシ」、『二葉の梅』に「加」と記した。

【北野聖廟靈驗記】

- ①越前国の悪漢池上七九郎（改名して石見三郎左衛門）は、八幡宮から宝刀（九寸五分の守り刀）を盗んで紀伊国へ逃亡し、岩村喜蔵に庇護される。
- ②石見は熊野湯の峯で、岡本三木之進・おつや夫婦を殺害し、卷子（おつやの父の郷里大和国梅谷村を興すための秘策を記す）を奪う。残された幼子お菊は、祖父（おつやの父）に引き取られる。
- ③ナシ
- ④石見は大和国梅谷村へ移り、卷子に記された秘策に沿って、隣村との間に水公事を起こして勝つ。同村の人々から礼物を得て富裕となり、南都の遊廓へ通い、そこで親しくなった馬淵郷右衛門に、肥後国加藤家への仕官を紹介される。

⑤石見は加藤家にて、重臣上田覺左衛門に剣術立合を望んで敗れ、上田を闇討ちにして逃走する。上田の子慶次郎は敵討に出、京都へ赴く。

⑥お菊は成長の後、無敵斎（播州の武術達人）の後見を得て敵討に出、京都へ赴く。

⑦ナシ

⑧石見は京都の親王家に身を隠す。

⑨ナシ

⑩お菊、慶次郎、各々敵討成就を願って北野天満宮に日参するが、互いに言葉も交わさない。ある日境内で、お菊が悪漢に襲われるが自力で撃退し、これを見た者はなかった。

⑪ナシ

⑫ナシ

⑬お菊は、石見が親王家に潜むことをつきとめ、所司代小笠原佐渡守へ敵討を願い出る。／慶次郎は、これより後れて石見の在処を確認し、所司代へ敵討を願い出る。／各々自分の側に優先権ありと主張する。／所司代は親王家に石見の引き渡しを要求するが、親王家側はこれを拒否する。／所司代はある日お菊、慶次郎を

召し、夫婦となるよう言い渡す。兩人顔を見合わずに、天満宮にて毎日見かけた相手であった。

⑭親王家では石見を秘かに逃がそうと謀るが、お菊、慶次郎はこれを察知し、道中で待ち受けて討ち取る。

### 【二葉の梅】

① [改] 越前国の悪漢池上七九郎（改名して石見三郎左衛門）は、八幡宮から深雪丸の剣（抜けば雪が頻りに降るといふ霊剣）を盗んで紀伊国へ逃亡し、岩村喜蔵に庇護される。

② 石見は熊野湯の峯で、岡本三木之進・おつや夫婦を殺害し、卷子（おつやの父の郷里大和国梅谷村を興すための秘策を記す）を奪う。残された幼子お菊は、祖父（おつやの父）に引き取られる。

③ [加] 石見は、岩村喜蔵の妹初瀬と馴染み、三之丞が生まれる。

④ [改] 石見は大和国梅谷村へ移り、卷子に記された秘策に沿って、隣村との間に水公事を起こして勝つ。このことで殊に石見を尊敬するようになった馬淵郷右衛門に、肥後国加藤家への仕官を紹介される。

⑤ 石見は加藤家にて、重臣上田覚左衛門に剣術立合を望んで敗れ、上田を闇討ちにして逃走する。上田の子慶次郎は敵討に出、京都へ赴く。

⑥ お菊は成長の後、無敵斎（播州の武術達人）の後見を得て敵討に出、京都へ赴く。

⑦ [加] 初瀬・三之丞は、石見の跡を追って肥後へと向かう。途中で初瀬は病没。三之丞は盗癖あり。

⑧ 石見は京都の親王家に身を隠す。

⑨ [加] 三之丞は、室町通の富商の娘を唆し、無敵斎（お菊の後見）から金子を騙り取るなど、悪行を重ねる。

⑩ [改] お菊、慶次郎、各々敵討成就を願って北野天満宮に日参するが、互いに言葉も交わさない。ある日境内で、お菊が悪漢に襲われ、懸命に戦うが危うくなる。これを見た慶次郎が加勢して撃退する。

⑪ [加] 石見は、親王家にて三月花の宴の折、公卿殿上人たちの前で、深雪丸の剣を用いて雪を降らせて見せる。これにより親王から殊に寵遇される。

⑫ [加] 石見は三之丞と再会する。

⑬ [改] お菊、慶次郎は、それぞれ別々に、石見が親王家に潜むことをつきとめ、同時に所司代建川藤高へ敵

討を願ひ出る。／所司代の御前で顔を見合わずに、天満宮にて救い救われた相手であった。／各々自分の側に優先権有りと主張する。／所司代はその場で案じ出し、自ら媒して夫婦となす。

⑭親王家では石見を秘かに逃がそうと謀るが、お菊、慶次郎はこれを察知し、道中で待ち受けて討ち取る。

以下実録『北野聖廟靈驗記』から読本『二葉の梅』への改変付加の跡をたどってみる。まず梗概の①において、石見が盗んで所持した刀を、『北野聖廟靈驗記』では九寸五分の守り刀としていたのを、『二葉の梅』では深雪丸の劍（抜けば雪が頻りに降るといふ靈劍）とした。こゝは、石見三郎左衛門が越前国で刀劍を盗んで紀伊国へと逃亡し、そこで岩村喜藏なる人物に庇護される話である。『北野聖廟靈驗記』では、紀伊国那賀郡の郷土岩村喜藏は熊野湯の峯で石見に出会い、彼の「大男にして眼ざし常ならざる」様を見て近付きになり、石見が例の守り刀を見せると、由ある者と信じて自宅に招き滞留させたとする。

（石見は）彼にしきの袋に入し守り刀を出して、「是

は親ども拝領有し大切の御守り刀なれば、肌身放さず所持致すなり。我も武家の奉公望む身のうへなれば、諸国武者修行を致して爰に來り、幸ひに入湯いたし候なり」と語りければ、岩村喜藏右の守り刀を見てよし有浪人なりとおもひて大きに悦び、元來武術を好める事ゆへ甚だ心に叶ひ、「某は当国那賀郡の者なり。是より程近ければ我方へも來られ滞留し給へ」と……

この時岩村は「郷士なれども数年無禄にてくらし尾羽うちからし、身上持かせきに出ん」としていたとし、この男を仕官の便りにもと考えたとして、岩村が石見を庇護したことの説明に理を通してゐる。

一方『二葉の梅』では、信用した側の心情に一段立ち入って描く。石見は逃亡して熊野の山中へ至るがここで飢え、門構え良き家に一飯を乞う。主岩村喜藏は彼を招き入れ、並々ならぬ武士と見て劍術の奥義を問うと、弁舌巧みに答える。岩村は「大に心服し」劍術師範として逗留させる。この状況のもと、石見は深雪丸を用いて信を揺るぎないものとして岩村方に安住したとする。

或日炎暑絶たふがたきをりふし、門人数多打寄し時に、

……沐浴して庭をりをり、呪文を唱え刀を抜はなせば、

不思議や、一天かき曇り雪しきりに降しかば、満座の人々はものをさへいはず忙<sup>あき</sup>れはて、居たりしが、「誠に先生は神人なり。此上は分骨<sup>ぶんこつ</sup>碎身して奥儀を学び申べし」と、奇異のおもひをなしければ、……

是より石見三郎左衛門が名遠近に響、熊野は更なり、近国より聞伝へ門人となりければ、能<sup>よき</sup>隠れ家を得たりと、喜蔵が食客となりて有福に暮しけり。

炎暑耐え難き日を選び満座の人々の前で、初めて深雪丸を披露する。かくて人々が石見を信じ崇めたのも避けがたいことであつたという、人の心情の起こる必然を表す。読本ではこのように実録の示した筋を発展的に使つていく。

梗概②、石見はおつや夫婦を害して卷子を奪い、④で大和国梅谷村に移り、卷子に記された秘策に沿つて隣村との間に水公事を起こして勝つ。「北野聖廟靈驗記」では、近郷の村人たちが感謝して「日々に音物を送」つたことによつて「身上ゆたかになるにまかせ」、南都の遊廓に通い、そこで馬渕郷右衛門なる男と昵懇になり、例の守り刀を見せると、馬渕は、由緒ある者と信じ肥後加藤家

への仕官を世話したとする。

(石見は)ひたすら遊里へ入こみかよひける。宮家の御家来馬渕郷右衛門といふ人と入魂<sup>じゅこん</sup>に相成て、「手前は越前の浪人なり」とて、我家に伴ひ帰り、彼錦の袋に入たる守刀を見せければ、郷右衛門も「さてはゆへ有浪人」と思ひ、……(肥後加藤家に勤仕する従弟に紹介しようと言う。)

これはこれで事の経緯を矛盾無く説明している。

一方『二葉の梅』では、梅谷村へ移る時、岩村喜蔵が石見を「剣術の達人なり」とする紹介状を鈴木作右衛門なる者に送り、鈴木が石見に住居を与えて剣術師範をさせたことが加わる。そこに水公事の勝利があつて石見はますます村人から崇められたが、殊に馬渕郷右衛門は彼を尊敬し仕官の世話をしたとする。

(石見は水公事の勝利によつて)次第に其沙汰広く、近付にならんと門前に市をなしける。爰に南都の宮家の家来に、馬渕郷右衛門といふもの、わきて三郎左衛門を尊敬し、剣術柔術智恵才覚迄たくましき男をかゝる在郷に置んは、玉を泥中に沈め置がごとしと、……(肥後加藤家に勤仕する従弟に紹介しよう

と云う。）

馬淵は石見の一連の行動から、彼を武芸達者である上に才智も勝れる者と見て取って心を動かしたとする。ここでも、人の心情に沿ってその必然を示していく書き方になっている。

『北野聖廟靈驗記』では冒頭の章段を「池上七九郎越前出奔之事并七九郎熊野湯の峯へ至る事」と称し、七九郎（即ち石見）が然々したと事の経緯を叙する、実録流の姿勢を示している。一方『二葉の梅』では章段名を「池上七九郎が伝」とし、人物として石見に注目しようとする。本作には、石見が悪人としていかに生きたか、その生き様を全体像として示そうとする意図が貫流している。また、実録には全く見られない石見の妻子のことが加えられた（梗概③、⑦、⑫）。石見と初瀬との間に生まれた三之丞は、剣術に勝れ生来盜癖があつたとされ、石見の性質を受け継いでいる。彼は悪事を重ね、終に父がお菊と慶次郎に討たれるのを見るや懺悔自害する。己の罪を告白し、「誠親の悪しき血筋を引しとおもひ合せ侍る。かゝる悪人共なれば、いかで天道ゆるし給はん。……此上の情には、我死骸父と一緒に埋み給はれ」と述

べて絶命する。越前における七九郎に始まった悪は三之丞へと分岐して増長し、終に父子ともに滅んで終結する。実録は、事と事との繋がりを、筋を通しながら叙述していく。読本では、人の心情の必然によって話を連結しながら、同時に全編を構造として捉えようとしていることが見て取れる。

## 二二一 歌舞伎『けいせい会稽山』

歌舞伎『けいせい会稽山』（近松徳三作）の存在を島津忠夫先生より教示いただいた。この戯曲の詳細については『島津忠夫著作集』第一巻（二〇〇七年、和泉書院）に記される。実録『北野聖廟靈驗記』と対比してみると、これに依拠したものであることが知られる。初演は読本『二葉の梅』に先行する寛政二年（一七九九）。以下島津先生より複写を貸与いただいた愛知県立大学蔵写本に拠って掲げる。この作では真柴家（真柴久吉は即ち羽柴（豊臣）秀吉のこと）と肥後加藤家に関わる騒動を新たに設定する。加藤家に仕える八代一角、実は明智光秀の弟左馬五郎光興であり、兄を討った真柴久吉とそ

の一族を滅亡に追い込み無念を晴らそうと企てる。真柴

久秋が父久吉の命を受け、家の重宝深雪丸の剣を有馬湯の峯権現へ奉納。一角は池上七九郎（後の今見三郎左衛門）に命じ、この深雪丸を盗み出させ、また岡本三木之進を害して卷子（本作では軍学の書「水術の一卷」とされる）を奪わせる。加藤家の老臣上田覚左衛門は一角の正体を看破するが、七九郎によって闇討ちにされる。岡本の娘お菊、上田の息子慶次郎は、それぞれ七九郎を敵と狙い、終に討ち取る。

池上七九郎（今見三郎左衛門）は、八代一角から「一飛びの立身、大名になる気はないか」と持ちかけられ、己の慾に従って行動している如くであるが、実は明智の家来四方天の伴であったとされている。終末部、桃山の執権岩倉競正がお菊と慶次郎への助力を始めるや、岩倉によって一方的に欺かれて深雪丸を騙し取られ、終に誘き出されて兩人に討ち取られる。同じく実録『北野聖廟靈驗記』を典拠としながら、『二葉の梅』が七九郎の悪に着目し、その一貫した生き様を描き出すことを全体の中心に据えたのとは方向が異なる。

読本『二葉の梅』が、石見の盗んで所持する刀を深雪丸の剣としていたのは、この『けいせい会稽山』に拠っ

たものである。「霰たばしる乱れゆき、抜けば忽ち空かきくもりて一トしきり降る雪催ふ」（七ツ目）の如く、剣を抜けば雪降る場面が舞台での見せ場となっていたと推測できる。『二葉の梅』ではこれを、石見が人に崇敬の念を起こさせる道具として使ったのである。『二葉の梅』の作者栗杖亭鬼卵が『けいせい会稽山』を参照していたことは、次に掲げるお菊と慶次郎の拮抗とその解決の扱い方においても窺い知れる。

### 二・三 『けいせい会稽山』から『二葉の梅』へ

前記の梗概⑩と⑬、お菊、慶次郎が北野天満宮で行き会い、その後各々敵石見三郎左衛門を見出し所司代から敵討許可を得るくだりは、実録『北野聖廟靈驗記』と読本『二葉の梅』との間で大きな相違がある。この相違が生じた経緯は、間に歌舞伎『けいせい会稽山』を置いてみることにによって理解できる。

まず『北野聖廟靈驗記』における⑩の話。お菊と慶次郎は互いのことを知らず、各々敵討の成就を願って北野天満宮に日参するが、言葉を交わすこともない。ある日境内でお菊は悪漢に襲われ自力で撃退するが、慶次郎は

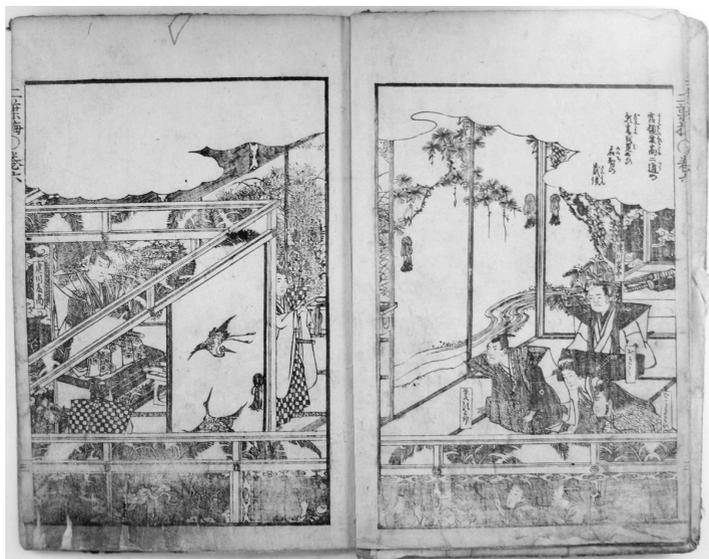
これを知らなかった（―天満宮では兩人直接関与を生ぜず）。⑬、お菊の方が先に石見が親王家に潜むことをつきとめ、所司代小笠原佐渡守に敵討許可を願ひ出る。慶次郎は、先日敵討を願ひ出た者がいるとの噂を聞いて、自分も探りを入れて石見の在処を確認し、敵討を願ひ出る（―慶次郎の方が後手に回っている）。慶次郎は、お菊なる者はいかなる家系かと秘かに探り、所司代に對面して彼女を貶めつつ自分の優先権を申し立て、これを知ったお菊の側は反論する。一方、所司代と親王家との間では、石見の引き渡しの要求と拒否が再三繰り返される（これは武家と公家との対立の問題）。事態行き詰まる中所司代はお菊、慶次郎を同じ座に召し、夫婦となるよう言い渡す。兩者互いに顔を見合わずに、天満宮で毎日見かけた相手であった。

（所司代）「……慶次郎も数年ほうぼう敵をたづねめぐりし身なれば、いまださだまる妻も有まじ。菊もおなじく所々を廻りし事なれば、外々に嫁するやぐそくもあるまじ。ゆへ慶次郎、菊を妻とさだむべし。然らばたがい親しうとの敵なれば、兩人心をかわせうちとるべし。……」（兩人、拜伏して

承り）互に顔を見あわせれば、いつぞやより北野天満宮参詣いたしけるたびごとに社頭にて出あふか、または道にてゆきあふか、せひあわずといふ事はなかりしに、たゞいまの上意を聞てそれと口にはいわねども、天満宮の御引あわせなると、たがいに目と目を見あわせてこそうつむきける。小笠原殿近習にあふせ付られ、用意の三宝、のし、こんぶ、かわらけすへてもちいづれば、小笠原殿かわらけを取上給ひ、……（夫婦固めの盃をなす。）

兩人の結婚は、所司代が膠着状態を打開するために予め考案した策であった。祝言のための品々を用意した上で、兩人を召して申し渡ししている。

『二葉の梅』ではこの話に改変が加えられる。お菊と慶次郎はそれぞれ敵討の成就を願って北野天満宮に日参するが、互いに言葉を交わすこともない。ある日境内でお菊が悪漢に襲われ、懸命に戦うが窮地に陥る。これを見かねた慶次郎が加勢して救う（―天満宮で兩人互いに関与）。この後お菊と慶次郎は、別々に同時進行で石見の在処をつきとめ、同時に所司代建川藤高へ敵討を願ひ出る（―兩者は全く対等）。ここで作者は、対等を強調



『梅葉二葉』巻六 お菊、慶次郎（右側手前）、  
同時に建川藤高（左側奥）へ訴え出る。（島根大学附属図書館堀文庫蔵）

する次の一節を入れている。

（お菊、慶次郎それぞれ）同時に建川の館に來り、取次を以て敵打の事を願ひける。取次二通の許状を以て藤高の前に来り、「不思議の事の候者かな。親王家の家來石見三郎左衛門と申者、長州の家臣北川新十郎が孫娘、親の敵と申、又加藤家の家臣上田慶次郎と申者、是又石見三郎左衛門を親の敵と、兩人許状を以願出候。敵は老人、討人は兩人、一時に願出候儀、前代未聞の義に候」と申ける。

兩人所司代建川の御前に呼び出され、互いに顔を見合わすに、天満宮にて救い救われた相手であった。が、双方自分の優先権を主張して譲らない。所司代はその場で案じ出し、兩人に盃を与え夫婦となす。

互に良を見合すれば、先日北野にて難を救ひし婦人なれば、兩人大に驚きながら、夫とも言はず謹で叩へける。（兩人とも所司代に対し、各々討つ権利を主張して譲らず。）……藤高双方の争ひをつくづくと聞給ひ、暫く思案ありけるが、「慶次郎は何歳に成り給ふぞ」。慶次郎謹で、「当年十八歳に相成候」。お菊を近く呼れ、「そなたはいくつになるぞや」。お

菊貞赤やかに成して、「わらは、十六になり侍る」。藤高手をはたと打給ひ、近習の者を召て銚子土器をとり寄、自みづから一つほしてお菊にさし給ひて、「其酒を呑で慶次郎へさすべし」。お菊不審ながら、大名の命なれば、少し呑で慶次郎へさす。慶次郎も何かはしらねども頂きて一つ呑ければ、藤高公、「是へつかはすべし」と、又一つ請給ひ、「……今日より建川藤高が媒にて、慶次郎、お菊夫婦となす也。然る時は、お菊が親は舅姑なり。またお菊は上田覚左衛門則すなはち舅なり。互に舅親の敵なれば、一二をあらそふにおよばず。兩人にて討んは本望ならずや」と利非明白の仰に、

これは所司代がお菊、慶次郎の拮抗矛盾を見て取り、「暫く思案」して「手をはたと打」、その場で直感的に案じ出した策である。銚子土器の用意も即興的に命じている。

『二葉の梅』の作者栗杖亭鬼卯は以上のような改変をなすにあたり、歌舞伎『けいせい会稽山』を参照したと推測する。『けいせい会稽山』では、酔漢に襲われたお菊を慶次郎が助ける話がある。ただしここでのお菊は全く武芸の心得がなく、怯えながら慶次郎に助けを求め、

その上言葉を交わし言い寄っている（慶次郎を自分の敵討の後ろ楯に頼みたい思いも含まれる）。慶次郎も、撃退の後の別れ際に「墨染を後日お訪ねなされよ」と自分の居留地を示し、「立留り振返り、お菊顔見合せ、双方こなし有てちよつと目札」と、恋の始まりの如く書かれる。この後お菊は押しかけて嫁入りして来るが、慶次郎は大望ある我が身を思いこれを断る。一方で敵の探索の方は進捗し、それぞれ自分の親の敵が池上七九郎（今見三郎左衛門）であったことを知り、岩倉競正に届け出る。双方張り合うところ、岩倉がかねて用意の三方土器調べて媒妁をなす。恋情の叶ったお菊は「嬉しきこなし。喜び立ち騒ぎ」、「是といふも、あゆみをはこんだ天満宮の御利生」と歓喜する。

『二葉の梅』では、『けいせい会稽山』が兩人天満宮において救い救われる関係になったとしたのを取り入れたものと推測される。ただし、二人の間に恋情に繋がるようなものがあつたとは書かなかつた。双方、当初天満宮で互いの姿を見て気にはとめていた。

上田慶次郎は日毎に参詣して、お菊を見て、やさしくも女の身に日参あるものかな。深き願のあるやら

んとのみ思ひて、終に詞をもかけず。お菊も、清らかなる若衆の神前に願言の真心なるを殊勝におもひ、

やさし、殊勝とは認めたが、それ以上のもものではなかつた。慶次郎がお菊を救つた直後も、これで何か特別な感情を生じたとはしない。その上で、これが互いの深き因縁の予兆であつたとは後になって思い知ることであつたと記す。

(お菊は)慶次郎に向ひ、「扱々思ひ寄らぬ事にて難儀致せしに、御身さまの御陰にて(悪漢は)皆々逃去りしと見え侍る有難さよ」と礼謝すれば、慶次郎も、「婦人の途中にて御難儀と見受挨拶せしに、理不尽なるやつばらゆへ、無拗加勢いたせしなり。御礼に預る程の事にあらず。御縁もあらばまた御目にかゝり申さん」と立別れけるが、深き因縁の初とは後にぞおもひしられける。

この天満宮の場面において鬼卯は、『けいせい会稽山』を踏まえながら敢えて違ひを出した。敵討に恋愛という要素を混在させて解決へと運ぶという方法をとることなく、まずは兩人をそれぞれ己の敵討のみに生きる人とし

たのである。

所司代による婚姻申し渡し直後の文脈にも改変がある。『北野聖廟靈驗記』の該当箇所(前掲)では、「天満宮の御引あわせなるかと、たがいに見目を見あわせてこそうつむきける」と、当人たちが、こうして互いに夫婦となることについて、天満宮の計らいと受けとめたとする。一方『二葉の梅』ではこの時の当人たちの反応には一切触れず、同席していた無敵斎(お菊の後見人)が「いかさま明君の御差図、残るかたなき御計ひ」云々と礼謝し、これに対して所司代が敵討に助力する旨を次のように語つてこの話は終わる。

(所司代)「……親王の御所をおびき出し、兩人に本望遂さすべし。かならずせく事なかれ。しかし兩人日々心をつけ、石見を取逃さぬやうに、細かくを付をくべし」と、其日は館をかへりしが、是全く天満宮の御利生ならずや。

鬼卯はこの話を男女間の事と捉える視点を意識的に回避していると思われる。ここでいう御利生は縁結びのことではない。両者の間で高まった矛盾が超えられ、事態は一気に解決へと向かう——この解決をもたらしたのが天

満宮の御計らいであるというのである。

別々の土地で親を討たれ全く知らぬ同士の生き様を、恰も平行する二線の如く交互に描いていく。同時・対等」という状況の中、平行は対立・矛盾へと至る。そしてこの矛盾が極限まで高まった時、急転回によって解決がもたらされる。前引の「是全く天満宮の御利生ならずや」とは、先の天満宮での一回限りの接点を予兆であつたかと顧みつつ（「深き因縁の初とは後にぞおもひしられる」）、この解決を奇瑞の如く感慨を以て捉えようとするものである。かくて読者は、この平行から対立・矛盾へ、予兆、急転回による収束という、全編にわたる構造を了解しつつ読むことになる。作者鬼卵は、実録『北野聖廟靈驗記』に、掲げてきたような改変付加を行うことによつて、読本独自の様式へと編み直そうとしたと解される。

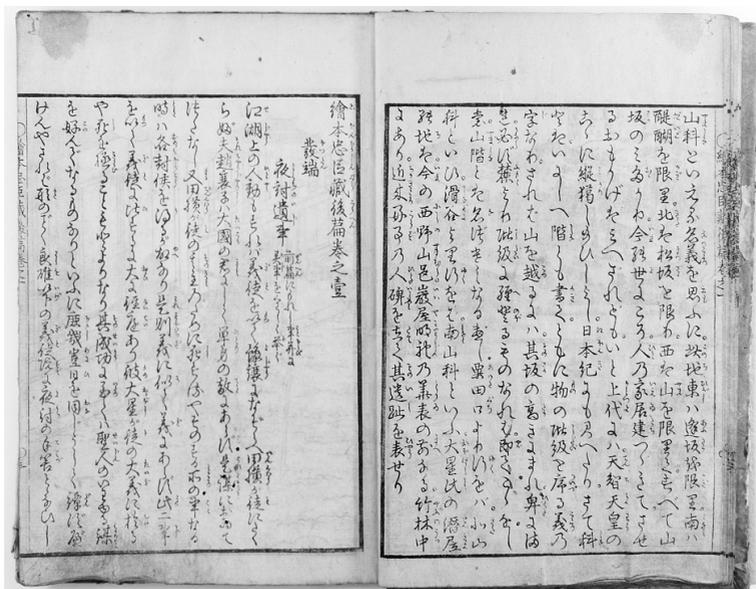
### 三 『絵本忠臣蔵』について

次に河本家蔵の版本の中から読本『絵本忠臣蔵』について検討する。速水春暁斎作・画。前編は寛政一二年（一八〇〇）、後編は文化五年（一八〇八）刊。各編それ

ぞれ一〇巻一〇冊。書名によれば浄瑠璃『仮名手本忠臣蔵』（寛延元年（一七四八）初演）を小説化したものの如くであるが、実際の内容は、実録『赤穂精義内侍所』に大きく拠っていることが、山本卓「義士伝実録と『絵本忠臣蔵』」に指摘されている<sup>(7)</sup>。

本作のように書名を「絵本……」とする一連の読本を、〈絵本もの読本〉と称する。これは『絵本太閤記』（初編寛政九年（一七九七）刊）に始まり幕末まで脈々と続いたジャンルで、実録を種本とし、挿絵を多く入れ、版本として刊行された。上方が制作刊行の中心。ただし単なる実録の敷き写しではなく、作者の見解による改変や増補が積極的に行われていることが、近年の研究により明らかになっている<sup>(8)</sup>。

『絵本忠臣蔵』は、登場人物名について、浅野内匠頭長矩、大石内蔵助などと実名を用いるのではなく、塩谷判官高貞、大星由良之助などと『仮名手本忠臣蔵』の人物名を宛てるといった加工を施しているが、話の内容そのものは実録『赤穂精義内侍所』を種本として赤穂仇討事件を描くものとなっている。『絵本忠臣蔵』が実録『赤穂精義内侍所』をいかにして取り入れているかについて



『繪本忠臣蔵』後編卷一冒頭 (河本家蔵)



『繪本忠臣蔵』後編卷一 塩谷諸士討ち入りの図 (河本家蔵)

は山本前掲論文に詳述されるが、今回稿者が兩作を比較してみて気付いた点を以下に掲げ、この『絵本忠臣蔵』の特色に関する私見を述べることとしたい<sup>(9)</sup>。

### 三・一 塩谷判官と高師直の確執

塩谷判官と高師直との間に確執が生じ終に塩谷が師直に切り付ける経緯に関して、『絵本忠臣蔵』はほとんど『赤穂精義内侍所』を踏襲している。即ち、塩谷が十五歳で初めて將軍に御目見した時に師直が塩谷を蔑んだこと、茶席において西行法師の一軸の真贋をめぐる塩谷が師直を論破し、これを師直が恨んだこと、塩谷が勅使に対する饗応司（接待役）に任命された折に、師直は度々自分に賄賂を贈るよう仄めかすが塩谷が贈らなかつたため、師直は故意に塩谷を冷遇して恥を与えたこと、かくて塩谷の憤りは限界を超え終に刃傷に及んだこと等である。また全体にわたって筋も文章表現も『赤穂精義内侍所』と大きく重なる。ただし『絵本忠臣蔵』において独自の工夫がなされた部分もあったと認める。

『絵本忠臣蔵』の次の場面、塩谷判官が饗応司に任命された時、師直に、よろしく指図を賜りたいと挨拶する

と、師直は承諾の旨を答えつつ、かつ賄賂をよこすよう仄めかしたとする。

時に師直、「某も不案内には候へども、聊存知の事は相談に及び候べし。土岐氏（饗応司の相役、土岐

右京亮）へも申如く、（勅使は）近々御来駕有べき也。尤勅使へは毎日進物有て然るべし」と申されける。

勅使への進物と述べて実は自分への賄賂を求めている。このあとも、勅使接待に関して「金銀をいとはず申付べし」と述べて「余所ながら賄賂の催促を為」ものの、塩谷は贈らなかつた。かくて師直は、塩谷による勅使宿坊のしつらえ、膳の準備のありようを頭ごなしに否定し、「如此事は再応尋問申さるべきに、余人に相談ありし故かくのごときの間違あり」、自分に指示を仰がない故に誤つたのだと決めつけ、「都て金銀を吝は常也」と罵倒した。緊迫が走つたが、塩谷家臣速見惣左衛門が陳謝し、師直は「万事心を配り進物等鹿抹なき様に計べし」と、また賄賂要求を仄めかし、何とかこの日は収まった。以上のことは全て『赤穂精義内侍所』に備わっており、『絵本忠臣蔵』はそれを踏襲したのである。

ただしこれに続く一節は、『絵本忠臣蔵』の作者速水

春曉齋が新たに付加したものと考えられる。師直は、前掲のように仄めかしたにも関わらず依然塩谷からの賄賂がなかったため、これを不快とし、更に塩谷を罵った。

(師直は) 昨日建長寺に於て塩谷が家臣速見惣左衛門へ音物の諭を以て賄賂を乞ければ、定て其夜は其沙汰にも及ぶべくと心に是を待れしかど、終に其事なければ、心に怒り、鶴が岡に入来りて塩谷判官に向ひて申けるは、「饗応の品例年には事替り麁相に候也。大切の賓客成ば丁寧を尽さるべきに、以の外的事也」とことごと敷答らる。

傍線部は、やはり表向き勅使への接待のこととしながら実は自分への賄のことを言うものである。しかし塩谷はこれを言葉通りの意味に受け取り、しかし管領からは花美を制せられていると返答した。これが師直の怒りに火を付けた。

高貞揖讓して申るは、「仰の趣至極せり。さりながら管領より花美を制し給ふ由仰渡され候」と言ければ、師直面を荒らげ、「判官殿は田舎人ゆへ礼式を知られざるは尤也。式法は京家の支配成に、管領に下知を受らる、社奇怪也。惣じて侍は貧福に限ら

ず君の為には一命をも捨る事珍らしからず。賓客を饗応するに、など金銀の費を思ひ疎に致べきや。畢竟其元鄙吝にして管領の詞を幸ひに、我は只なるこそ不敬なり」と、

ここで師直は、塩谷が自分以外の者に下知を受けたことを殊に憤っている。作者速水春曉齋は『赤穂精義内侍所』に描かれた師直に、自分のみが人の上に立って差配できる人間であるとする優越にこだわり、賄もその上下関係の証しと考える者という人間像を読み取り、それを強調しようとしたと解される。そして一方の塩谷は師直のそのような心のあり方を結局理解し得なかつたとしているのである。

高貞忽ち面色変じ、「管領の指揮を守るに如何不調法に候や。急度承り候べし。返答に依て思案有り」と早忍へ難き体に見えければ、其座の諸侯手に汗を握り扣へらる。

速水春曉齋は、両者の確執の根本をこのような点に捉え、そのことを示すべくこの一節を設けたものと考えられる。

三二一 大星由良之助の思慮

『赤穂精義内侍所』において、主君浅野長矩が殿中刃傷により切腹を申し付けられ御家断絶となった後、大石内蔵助にとって最初の課題は、固い復讐の意思を持つ同志とそうでない者とをふるい分けることであつたとされている。大石が寄り合いを開く度に、案の定離脱者が現れた。そして最後に残つた人々に向かつて次のような対し方をしたとする。大石は、殉死覚悟で城に集まつてきた人々たちに向かつて、昨日までは、城を枕に殉死しようとして述べていたが、一旦城を明け渡して生き延びることにしたい、と告げる。つまり殉死を掲げたことにより、家臣の中から動かぬ志を持つ人のみがここに残つたと判断し、そこでいよいよ真意を告げるというのである。

(大石)「我心中に一つの大義を思ふことあり。登城の面々において心を措くには非ね共、いまだ露にいひ難し。よつて一先城を明渡し、追て肺肝を明かすべし。……」……されば大石昨日まで死を勧め、今日又生を説く、是則謀事なり。……(人々は)良雄が心底推察するもせざるも、「兎角良雄の下知次第」と、一向に命を任するものなり。

ただしここで大石は、生き延びてどうするかについては今は言えないとしている。そこで奥野将監ら四人の者が不審を述べると、この人々にのみ窃かに明かしたとする。

「某の所存といふは、城を無事に明渡し暫く命を全ふして、吉良を討て亡君の泉下の御憤を休め、其後に切腹せば、苔の下にて君に拜謁して其の口をあまんず、死後の栄名は千歳に経るとも朽ざるべし……」とありければ、奥野をはじめ四人とも……喜悅の色を顕しける。

『絵本忠臣蔵』ではこの話に以下のような変更を加えている。大星由良之助は、まず大寄合と称して諸士を城中へ集め、城を受け取りに来る幕府の上使を待ち受け、切腹殉死しよう、と呼びかける。その後も寄合を重ねるが、その度に離脱者が現れた。そして途中から「城を一旦明け渡してから殉死」という方針に転じ、いよいよ最後、決死の覚悟で残つた人々の前で、本心を明かした。やや長くなるがまとめて引用する。傍線部は、最後まで残つた人々が決死の覚悟を表した所、また点線部は、大星が敵討の意思を人々に直接明かした所である。

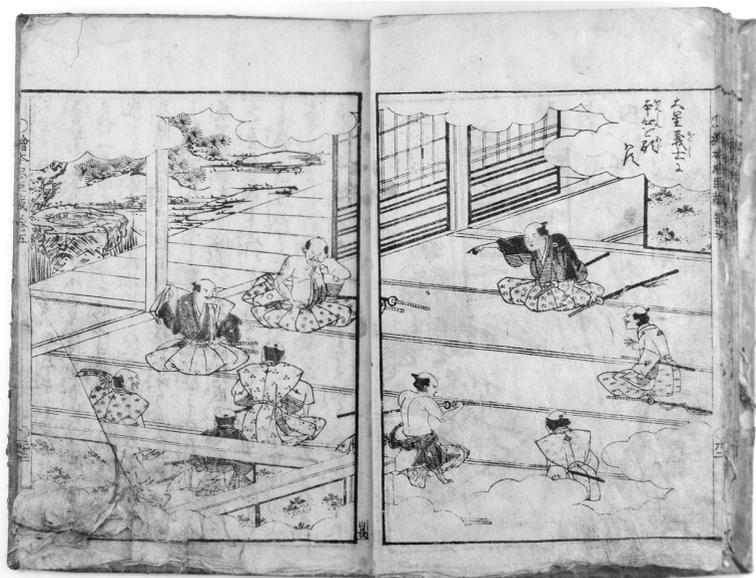
去程に大星由良之助は城を事なく引渡し、直に我

第に帰り、義士が来り集るを見るに、昨日迄七拾余人有つるが、今日に至りて良減じ漸五拾人には過ぎりける。由良之助打笑ひ、「嗚呼頼み難き世の中、草の露朝日を待ず。朽たる繩を以て胡馬を繋ぎ留るとも、只ゆるされぬは頃日の人心ぞかし。各忠節を抽んで老母妻子を顧ず一命を義のために軽んぜらる、所感激に堪たり。去ながら各最早心残りの事もなく候哉」と座中をきつと見れば、人々答へて申けるは、「昨日の御一言にて切腹と存詰候へば、何事も思ひ置事なく候。介錯は由良之助殿御指図下され候へ」と皆々肩衣を後へはね刀を腹に突立ん気色をとくと見て、大星小声に成て窃に申けるは、「天晴成御心中相見へ候。傍の器量を撰み今日迄は口外を出さず候。我各に申談する子細の候。各は如何思ひ玉ひ候や。臣が心残りに候は、高師直にて社候へ。各今日徒に殉死を遂る共、亡君の為御憤りを休むべくとも覚へず。死は安くして生は難し。且君の仇には共に天を戴ずといへり。暫く命を延し謀を以て亡君の讐高師直殿を討取て御墓に献じ、其上にて切腹をなさば、いよいよ尊霊も満足に思召、死

後の名は千載を歴ふとも朽ざるべし。臣此義を最初より思ふと雖、諸士の心底を計りし故、殉死を以て誓しに、案の如く段々異変の輩多し。然れども各始終心を変ぜず、只今死傷の場に至ても参会の事に候へば、斯密談に及よび候。臣不肖と雖身を亡じ君の恩義にゆだね、争か不忠の心を為んや。旁いかに」と義を振ひ舌を碎き、謀略計策を細に演述ければ、一座の忠士是を聞て悦ぶ事限りなく、弥義心を励し、「誰か身を安し人に後指をさ、れんや」とぞ申ける。

最後に残つた人々の決死の思いが極限まで高まつたその瞬間に、大星が一気に本心を明かす、こうすること、強い共鳴と結束を掴み取つたのである。速水春曉自ら描く画は、正にこの一瞬を捉えたものである（図版「大星義士に本心を顕はす」）。

大石内蔵助が人の心の深奥を読むことのできる人物であったとする解釈は、既に『赤穂精義内侍所』に存する。浅野長矩が江戸城で刃傷事件を起こした直後、二人の家臣が馬を疾走させ本国に到着し、早々にこのことを報告した。然るに大石はこれを睨み付け、かかる大事の使者

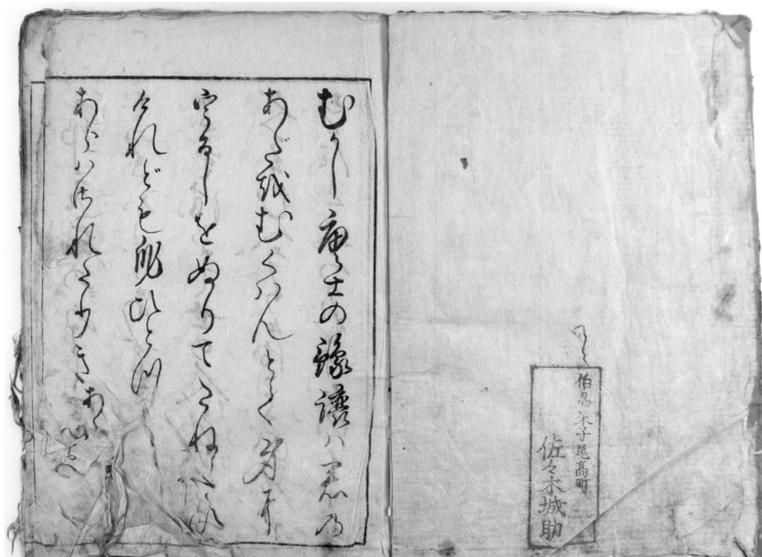


『絵本忠臣蔵』前編巻五「大星義士に本心を顕はす」(河本家蔵)

なるに何故延引したか、と厳しく叱責して下がらせた。子息主税が、延引との仰せは不審と述べるに、大石は答え、この兩人は長く殿の側にあつて心労蓄積していた上に、こうして短時間で駆け付けたのはひとえに念力のなす所である、然るにそこで天晴などと褒美の言葉を出せば、兩人とも張り詰めた心の糸が切れて即時に絶命する故、あえて叱り付けて休ませたのであつた、と明かす。『絵本忠臣蔵』ではこの話をそのまま踏襲している。速水春曉斎は、大星由良之助の人物像を把握した上で、この人ならばこの場においてこうあるのが最もふさわしいとする認識のもと、前掲の話を改変したものと理解する。ここにも、実録に備わる要素を継承しつつ自身の見解によつて発展させていくという、読本作者の方法を見取ることができる。

#### 四 終わりに

河本家には、『北野聖廟靈驗記』のほか、『厭蝕太平楽記』『慶安太平記』『大閤真蹟記』『双嶋豪傑』等の実録本が伝わる。そのうち『厭蝕太平楽記』は天明七年(一七八七)の奥書があり、同作の伝本の中では古いも



『絵本忠臣蔵』前編第1冊前表紙見返し部分に印  
「伯州米子尾高町／佐々木城助」（河本家蔵）

のと認める<sup>(10)</sup>。また実録を元にして成った読本として本稿で取り上げた『絵本忠臣蔵』については、その前編の各冊に「伯州米子尾高町／佐々木城助」の朱印があり、本の傷み方の特徴からも元は貸本屋蔵書であったものと見られる。これらの集書が行われた具体的経緯については未詳であるが、まずは広い意味で歴史に関する読み物という認識のもとで探求されたかと想像できる。ただし一方で『大日本史』『藩翰譜』『日本外史』等々いわゆる歴史の書が同家に大量に存することを考えれば、集書に携わった同家の人々の歴史に対する関心は、史実を知ることのみにとどまらず、人の生き方や内面などの領域にまで及んでいたことが窺い知れるのである。

河本家蔵書は島根大学附属図書館のデジタルアーカイブ及びA D E A C システムによって、画像公開が進められている。これによって、影響関係にある相互の資料、同一作の別本との対比などが極めて容易にできるようになりつつある。既に本稿もその裨益を受けているが、こうしたシステムを活用してそれぞれの資料固有の意義を解明していくことが今後の課題となる。

注

- 1 『米子工業高等専門学校研究報告』三七号、二〇〇一年  
一二月
- 2 『米子工業高等専門学校研究報告』三九号、二〇〇三年  
一二月
- 3 なお蔵書形成の背景をなす河本家の由緒、同家住宅（貞享五年（一六八八）築。国指定重要文化財）のことなどについては、河本家住宅ホームページ（<http://kawamotoke.com>）に詳しく紹介されている。
- 4 河本本の他に、稿者架蔵本がある。田中本は河本本と、文章はほぼ一致し、文字遣いに若干の相違がある。
- 5 実録という小説ジャンルの性質、実録写本の特徴などについては、高橋圭一『大坂城の男たち—近世実録が描く英雄像—』（二〇一一年、岩波書店）にその要点が尽くされている。
- 6 『<sup>近世</sup>二葉の梅』は、島根大学附属図書館蔵本による。
- 7 山本卓『舌耕・書本・出版と近世小説』（二〇一〇年、清文堂出版）所収。
- 8 菊池庸介『近世実録の研究—成長と展開—』（二〇〇八年、汲古書院）第二章第一節「絵本読本の展開」、同「実録から絵本読本へ—二つの「忠孝美善録」—」（『江戸文学』四〇号、二〇〇九年五月）、田中則雄「読本における上方風とは何か」（『鯉城往来』一〇号、二〇〇七年十二月）など。
- 9 『赤穂精義内侍所』の本文は、山本前掲論文に倣い、『赤穂精義三考』（西康雄編、一九九一年、手帖舎）によって掲げる。
- 10 注5高橋前掲書では、『厭蝕太平楽記』の成立は明和年間（一七六四—一七七二）以前と推定されるとし、高橋氏が確認された伝本のうち最も古い奥書は寛政四年（一七九二）であるとされている。河本本はこれより古い。
 

「何れの資料も、引用に際して句読点、濁点、会話を示す」を補った。

『けいせい会稽山』につき御教示下さった島津忠夫先生に深謝申し上げます。



国指定重要文化財河本家住宅（写真提供：琴浦町教育委員会）